岐阜県中学校社会科研究部会

第3回授業研究委員会

令和5年12月13日（水）14:00～
岐阜市教育研究所

＜全体会＞

1. 部会長あいさつ　会長　吉田 秀慈

2. 研究報告（中間報告）　授業研究委員長 古田 伸二

3. 各分野の活動報告（中間報告）
（1）地理的分野　地理的分野専門委員長 勝野 陽介
（2）歴史的分野　歴史的分野専門委員長 稲垣 直斗
（3）公民的分野　公民的分野専門委員長 前島 久恵
（4）資料集改訂　資料改訂委員長 梅村 亮介

4. 諸連絡
（1）社会科研究第65号の出版に関わって　主務　内海 照幸
（2）来年度の授業研究委員の選出に関わって
（3）全国大会報告　主務、各専門委員長
（4）西濃地区大会報告　研究推進委員長、各専門委員長

5. 副部会長あいさつ　副会長　武藤 裕二

＜分科会＞

1. 各分野における本年度の研究のまとめ　専門委員長

□分野長の提案のもと，本年度の成果と課題を明確にします。
＊授業研究委員会（公開授業）が実践のベースとなります。研究を深め，来年度につないでいけるよう，積極的に意見を出し合いましょう。

2. 諸連絡（締め切り及び提出方法の確認）　専門委員長
＊各専門委員長へ1月9日（火）までにメールにて送信してください。

3. あいさつ　分野顧問（教頭先生）
＊分科会終了後，分野ごとに解散してください。

令和5年度　授業研究委員会　本年度のまとめ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習

岐中社 授業研究委員長　関ケ原町立関ケ原中学校　古田　伸二

1 はじめに

社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次の通り育成することを目指す。

上記は，中学校社会科が目指す教科の目標である。その目標を達成するために，各分野の特性を踏まえた「社会的な見方・考え方」を働かせ，資質・能力を育成するとともに，社会的事象の理解，考察を図ることや，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて考察，構想（選択・判断）することを重視して実践してきた。

主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習

主体的に社会の形成に参画する力を次のように定義している。

獲得した事実に関する認識に基づき，価値に関する認識を形成していくことを通して，公共的な事柄に自ら取り組もうとする資質や能力

主体的に社会に参画する力を育成するためには，社会に対する理解があり，その上で構想（選択・判断）ができるとよいと捉えている。社会に対する理解を「事実に関する認識」，よりよい構想（選択・判断）をすることを「価値に関する認識」と捉え，次のように定義している。

事実に関する認識（結論が定まっているもの）

社会的事象の意味や意義，事象間の関連等の考察による知識や概念

価値に関する認識（結論が定まっていないもの）

・事実に関する認識や，相互の理解を踏まえ，合理的な意思決定をした判断基準の基となる価値【個人内での意思決定】

・事実に関する認識を踏まえ，折り合いを付けながら合意形成した構想（選択・判断）【集団での合意形成】

今年度の授業研究委員会の実践や西濃地区大会では，特に「価値に関する認識を形成する授業」の要素を取り入れた実践を重ねることで，公共的な事柄に自ら取り組もうとする資質や能力の育成，つまり，『主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習』の実現に向けて取り組んだ。県内には，夏季ゼミナールにおいて，岐中社との連携を図りながら，研究について説明する機会を設け，理論や実践を広めていった。今年度は，多くの先生方が，「価値に関する認識を形成する（要素を取り入れる）授業」を実践していただいた。その実践を通して，生徒に社会的な見方・考え方を働かせながら，社会的事象等を根拠に自分なりの意思決定をし，主体的に社会と関わる力を育むことができたと感じた。

2 各分野の授業実践の振り返り

○ロイロノートなどの効果的なICT活用や，議論を取り入れた授業を行うことで，互いの主張をぶつけるだけでなく，仲間の意見とすり合わせながら，よりよい社会のあり方，先人や自己の生き方について，考察，構想（選択・判断）しようとする姿が高まった。

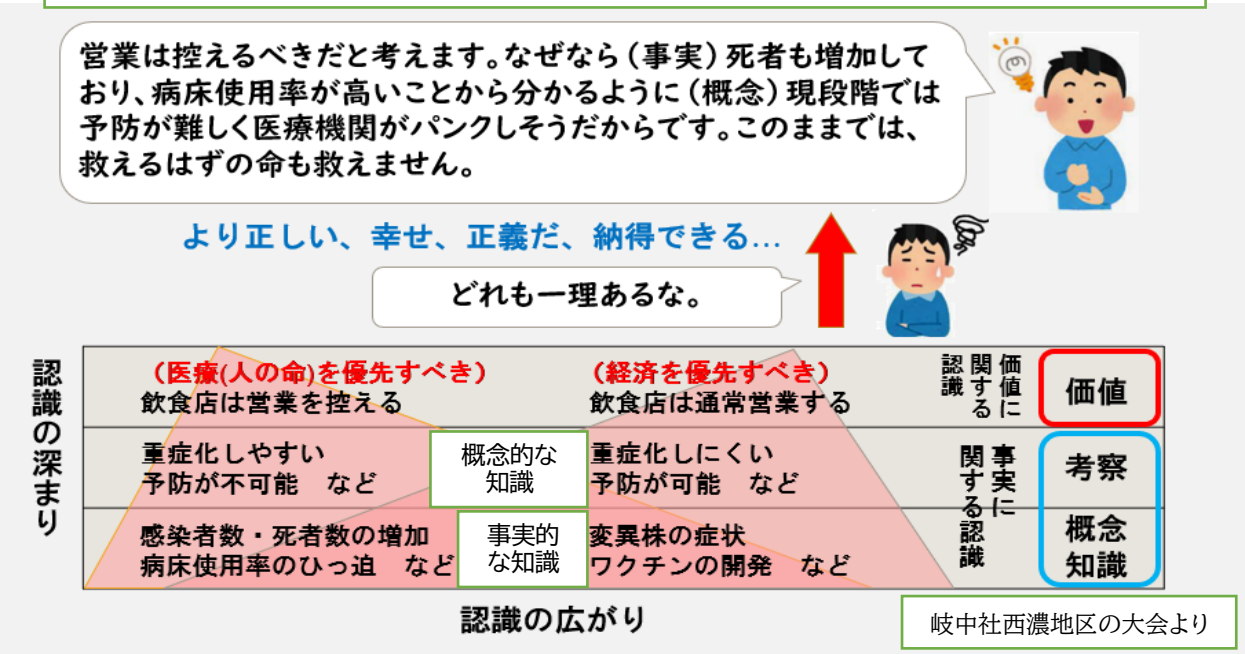
○どの授業にも PDCA のマネジメントサイクルの学習過程や生徒の思考を深める手立てがみられた。特に展開の後段では，これまでの生徒の意識に沿って，問い返しや新たな事象提示を行い，新たな見方・考え方に気付かせたり，考えを深めたりして，再構築させることができた。また，生徒がタブレット端末を活用して，考えを可視化しながら考えを整理したり，仲間との対話により，自分の考えを統合したりする姿もみられた。

●「価値に関する認識を形成する授業」では，選択・判断した内容の基となる根拠が明確でないため，最適解や納得解を見いだすことが難しい。

①「事実に関する認識を獲得する授業」モデルの定着・発展（下記の資料参照）

・より広い視野から，構想（選択・判断）するためには，どんな人が，どのよう社会環境や時代背景で，どのような価値(願い)をもっていたかを関連付けることが大切であると考えている。つまり，社会で活用できるような事実的な知識や概念的な知識(既有の知識と新しい知識の関連付け，知識と経験の結びつき)を獲得するための「事実に関する認識を獲得する授業」が土台となることが必要不可欠である。これまでの歩みの中で，岐中社が大切にしてきたことである。来年度は，この認識を深める授業の在り方も再度検討していきたい。ただし，確かな事実に関する認識を獲得させるためには，「指導と評価の一体化」を図り，生徒の学習状況を捉えたうえで，より一層教師の指導改善を図ることが求められると考えている。

「事実に関する認識を踏まえ，折り合いを付けながら合意形成した判断(集団での合意形成)」



岐中社西濃地区の大会より

・どのような社会環境の場か？・・・・・・コロナ禍での飲食店の営業
・どのような人か？・・・・・・・・・・・・・・・・飲食店の従業員とお客
・どのような願いがあるか？・・・・・・・・営業を控えるのがよいか，通常営業をするのがよいか
・どのような価値を大切にするか？・・営業を控える:「医療(人の命))という価値
・・通常営業をする:「経済活動」という価値
・構想(選択・判断)の基となる知識や概念は何か？
・・営業を控える:死者数の増加や病床使用率のひっ迫→重症化していて予防は難しい。
・・通常営業をする:ワクチンの開発など→予防対策ができて重症化しにくい
・コロナ禍の飲食店の営業形態の変化:折り合いを付けた構想(選択・判断)
「感染対策を徹底するならば，感染リスクが軽減する→営業を5時～20時まで短縮する」

②構想（選択・判断）した内容の価値や，その価値を尊重した判断基準を明確にした話合い

・「効率」と「公正」や「持続可能な社会」などの視点を焦点化して解決策を追究させることで，単位時間や単元のねらい（育みたい資質・能力）に迫るためのゴールを明確化する。

・生徒が自分の考えを主張しただけで終わらないように，揺さぶりをかける問いの構造化を図る。

例「○○の視点や○○の立場で共通点や相違点ないか？」→多面的・多角的に考えさせる。
「もし○○ならば○○ということにならないか？」　→批判的思考を促す問いにより，折り合いをつけて選択・判断させる。
「○○という価値から取り入れられることはないか？」

●「価値に関する認識を形成する授業」は，基本的に現在から未来の問題を取り上げながら，よりよい社会のあり方や自己の生き方を見いだすため，歴史的分野において学習を進めることが難しい。

①「事実に関する認識を獲得する授業」を基本として進める。また，どのような事実をどこまで深く追究させたいのかの意図性をもった単元構成を図る。単位時間の展開後段で認識を深める問いや事象提示により，確かな時代相を捉える（歴史観を捉えさせる）。

②「価値に関する認識を形成する授業」の要素を取り入れた「事実に関する認識を獲得する授業」の実践の積み上げ

・単元を通して学んできたことや，展開前段で獲得した知識や概念を基に，展開後段で，人物の判断についてプラスの評価に捉えるか，マイナスの評価に捉えるかなど，人物の願いに迫りながら，政策などについて，価値を分析・検討する。

・時代の転換期を取り上げ，その時代背景を踏まえて課題を追究する。また，どの立場で，どの時間軸で，どのような当時の人々や社会背景からの判断基準かを基に選択・判断し，出口を設定する。

※未来のよりよい社会のあり方や自己の生き方を構想（選択・判断）していくためには，過去や現在の分析・吟味等の過程が大切である。よって，歴史的分野や地理的分野では，公民的分野への系統的な接続を意図した学習を計画していくとよいと考えている。

3 終わりに

今年度，授業研究委員会や西濃地区大会の各分野での様々な授業実践から多くのことを学ぶことができた。そして，特に「価値に関する認識を形成する授業」への挑戦により，よりよい社会のあり方や自己の生き方を見いだし，主体的に社会に参画する力を育てるためには教師がどんな手立てを講じるとよいのかを検証し，岐阜県の社会科の方向性について共通理解を図ることができた。また，「事実に関する認識を獲得する授業」が生徒の考察，選択・判断を行うための支えとなり，質の高い理解（認識の深まり）を追求していくために必要不可欠であることを再認識できた。地理的分野と歴史的分野の公民的分野の接続への意識も高まってきた。授業を公開してくださった先生方，研究を支えてくださった先生方，校務もある中，本当にありがとうございました。

県大会　西濃地区大会が終わりましたが，次のステップに続く新たなスタートとなります。日常の授業で，生徒に力を付けさせるためのちょっとした手立てを考え，実践を積み上げることを通して，岐中社の理論と実践が県下に広まり，さらに深化させていくことを願っています。

令和５年度　地理的分野　本年度のまとめ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習

地理的分野専門委員長　岐阜市立藍川中学校　勝野　陽介

１　はじめに

今年度，これまで以上に授業研究委員の先生方に授業研究委員会で積極的に発言をしていただけた。西濃大会や全国大会にも多くの先生が自主的に参加するなど，岐中社の「チーム地理的分野」として活動ができ，研究が深まり，学びが多い１年となった。そのことに感謝をし，本年度のまとめとする。

２　研究内容

研究内容1「事実に関する認識を獲得する授業」

教師が**積極的な教材研究**を行い，**魅力ある題材**の授業づくりは，社会科の教師にとってとても大切なことである。地理的分野においては，現地に赴く，取材をすることが理想である。そのような題材を用いて，「事実に関する認識を獲得する授業」を「授業モデル」に基づき実践していく。その際，３観点となった評価の在り方を明らかにしながら，一昨年，昨年に作成した**年間指導計画をバージョンアップ**していきたい。

研究内容2「事実に関する認識を獲得する授業」だが，「価値に関する認識形成する授業」につながる授業

選択・判断を迫る学習（授業ではなく学習）は「事実に関する認識を獲得する授業」の授業モデル【段階Ⅱ】で実践できる。これは，「価値に関する認識を形成する授業」の実践に確実につながる。安易に選択・判断を迫る課題設定をするのではなく，**確かな事実認識を獲得することをねらいとしながら，**教師の問いかけやコーディネート，レーダーチャートの活用などで，**選択・判断**もしていく。これを「事実に関する認識を獲得する授業」だが，「価値に関する認識を形成する授業」につながる授業とし，積極的に実践していきたい。

研究内容3「価値に関する認識を形成する授業」

「価値に関する認識を形成する授業」については，地理的な見方・考え方に基づき，「今日的問題であるか」，「当事者意識をもてるか」を重視すると「南アメリカ州（開発と環境）」「地域の在り方」の単元で実践できる。この単元を中心に「価値に関する認識を形成する授業」の授業モデル②に基づき，**留保条件**を用いたり，**合意形成**したりすることに挑みたい。その際，トゥールミン図式の学習プリントの活用などで思考の可視化を図ったり，判断基準の明確化や異なる判断基準に気付きにつなげたりしたい。また，**評価規準を明確化**していきたい。特に，主体的に学習に取り組む態度の在り方に着目したい。

３　授業実践

授業実践１　美濃市立美濃中学校

授業者：二宮　諒　教諭

単元名：「アフリカ州」

【概要】「鉱産資源が取れるアフリカ州で貧しい地域が多いのはなぜだろう。」という課題について，ICT を活用して生徒自ら資料を選び，読み取ることを通して，モノカルチャー経済の問題点を産業の面から理解する「事実に関する認識を獲得する授業」の実践。

【授業実践１の考察】

〇資料選択できる力の育成を目指し，３年間を見通して付けたい力を明確にして，中１では教師が用意した資料から選択をさせることに重点を置いている。

⇒教師から与えられた資料だけでなく，自ら課題解決に向けて資料を探し，資料を選択できる力を育てようとしていることは意味あること。

⇒選ぶ力も大切だが，中１だからこそ，地図帳，統計資料の使い方，雨温図，主題図の読み取り方を確実に指導しきることが大切である。

⇒「世界各地の人々の生活と環境」と「アジア州」の単元を終えたなら，円グラフは割合，棒グラフは変化，折れ線グラフは推移を表していることは指導済みで，資料活用ができるようになっていることが大切である。

〇効果的に ICT を活用している。

⇒特に，「個別最適な学び」の実現において，ICT 活用は有効である。

⇒ICT 活用においても，地理的な見方・考え方を駆使することに留意すべき。地理の授業なので「どこに，何が，どのように，どれくらい。」を生徒が語ることができるようにしたい。

●小集団交流を６人の生活班で行っていた。

⇒３人～４人の学習班が小集団交流や話し合いには適している。６人では多すぎる。また，小集団交流を行う意図をはっきりさせたい。

授業実践２　恵那市立恵那東中学校
授業者：藤川　拓実　教諭
単元名：「北アメリカ州」
【概要】　「アメリカ合衆国を発展させたのは，移民なのか。」という課題で，単元の終末に位置付けた２時間構成の授業。１時間目は各自で調べてまとめる時間。２時間目の本時は，「移民」だけでなく「広大な土地」「国の政策」などの異なった仲間の視点の意見を基に，ディベート的対話をしながら，自身の意見と比べ，転用したり，批評したりすることで多面的・多角的に考察をする授業の実践。

【授業実践２の考察】

○ディベート的対話の授業展開において，生徒が異なる視点の生徒に質問をすることで，話し合いが活発になったり，挙手が増えたりした。

⇒生徒が前時によく調べて，自分の考えを資料を活用してわかりやすくまとめていた。考えを伝えたいという生徒が多くいたのは，日常の指導の賜物である。

⇒ディベートの場合は，立論の後，反対尋問や反駁で，相手の論理の矛盾を攻撃したり，質問や批判に対して反論をしたりする。これは，論の根拠となる各自が重視する「価値」を明らかにすることにつながる。ディベートの授業実践は，研究内容２の「事実に関する認識を獲得する授業」だが，「価値に関する認識を形成する授業」につながる授業の実践となりえる。

●地球的課題として，移民問題を取り上げたいという指導観はいいが，課題として「アメリカを発展させたのは移民なのか。」という課題は適切ではなかった。

⇒移民の定義があいまいではなかったか。知識として確実に押さえておきたかった。ヨーロッパ系，アフリカ系，ヒスパニック系，近年の ICT に関するアジア系では，時代背景も経済発展における要素も違うため，生徒同士で意見の交わりやぶつかりが生じにくくなってしまう。

⇒移民がその要素であることは否定できない。また，広大な土地や ICT や歴史など別の生徒が主張したこともちろん間違いではない。つまり，どれも正解であるため，生徒の思考で考えた時，ルールに則ったディベートではなく，ディベート的対話であったため，反論する必然性がなかった。生徒の思考をもっと具体的にイメージしたい。改めて，生徒の思考を大切にして，「本時のねらい，課題，評価（生徒の出口の意識）」の一体化を図るべきである。

４　研究内容のまとめと今後の方向性

地理的分野の全授業の９割は「事実に関する認識を獲得する授業」であるが，その９割の半分以上が，地理的な見方・考え方を育む授業，いわゆる「習得の授業」であることを確認したい。地理的分野においては，地図帳，統計資料の使い方，雨温図，主題図，グラフの読み取り方など指導しきる。「どこで，何が，どのように，どれくらい。」に着目し，説明できる生徒を育てる。「習得の授業」を確実に実施する。

教師の教材研究により，生徒にとって魅力ある題材を設定し，「事実に関する認識を獲得する授業」の授業モデル（段階Ⅱ）で選択・判断を迫ったり，ディベートの授業をしたりするなど，「事実に関する認識を獲得する授業」だが，「価値に関する認識を形成する授業」につながる授業を引き続き積極的に実践していきたい。

「価値に関する認識を形成する授業」については，新たな単元で実施するというよりも，「南アメリカ州（開発と環境）」「地域の在り方」の単元で，「価値に関する認識を形成する授業」の授業モデルに基づいて確実に実践する。その上で，授業モデルをブラッシュアップしたり，誰もが実践しやすい具体例で示したりしたい。

５　おわりに

意欲的な授業研究委員の先生方と活発に意見を交わすことができたからこそ，**「地理的分野として」「地理的な見方・考え方」を強く意識して授業実践する**ことが大切であるという基本を改めて強く感じた。この基本を外すことなく，次年度の実践につなげていきたい。

令和５年度　歴史的分野　本年度の研究のまとめ（案）

主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習

歴史的分野長　本巣市立根尾学園　稲垣　直斗

１　はじめに

今年度の授業実践では、２つの授業ともに幕末を取り上げて下さったおかげで比較したり関連付けたりして授業を参観し、考えることができた。特に研究討議においては「歴史的分野における【価値に関する認識を形成する授業】はどうあるべきなのか」という視点を中心に、授業研究委員会で今後の研究の方向性を考えることができた。価値に関する認識を形成する授業についての実践が広まりつつある中で、改めて歴史的分野における実践について、何を大切にしていくとよいのかを具体的に先生方と話し合うことができたことに感謝の思いを伝えるとともに今年度の研究と次年度の方向性についてのまとめとします。

２　研究内容

（１）「事実に関する認識を獲得する授業」

各時代相を見いだすことができる指導計画の工夫

・・・概念的知識をどう獲得させ、どのように時代の特色（時代相）を捉えるかを明らかにする。

認識を深めるための指導方法の工夫

・・・歴史的な見方・考え方を働かせて、認識を深める発問及び資料を吟味する。

（２）価値に関する認識を形成する授業

事実に関する認識に基づく多様な価値の明確化

・・・多面的・多角的に考察しながら、当時の人々の業績や願い、実現のための行動の過程、選択肢などに対する判断基準を吟味・評価する。

価値に関する認識を形成するための話合いの組織化

・・・相互の理解を踏まえたうえで、根拠や判断基準を比較・関連付けたり、構想（選択・判断）を行ったりしながら、意志決定を促す。

３　授業実践

授業実践１　岐阜市立岐北中学校（10/23）

授業者：水端　俊　教諭

単元名：欧米の進出と日本の開国

【概要】井伊直弼の決断

「井伊直弼はなぜ勅許を得てから日米修好通商条約を結ぼうとしたのだろう」という課題で、国内、国外の視点に基づいて、資料から井伊直弼の判断を追究した実践。授業の後半の深める場面では、井伊直弼の判断基準について反幕府勢力との比較から「日本を守る」という価値に迫って考え、終末では、井伊直弼の生き方から私たちは何を学べるのかを振り返った。<u>【事実に関する認識を獲得する授業】と【価値に関する認識を獲得する授業】の接続の授業（価値に関する認識を形成する授業）</u>

【授業実践１の考察】

（１）「事実に関する認識を獲得する授業」

・認識を深めるための指導方法の工夫

○経緯を説明しながら丁寧な課題化を図り、生徒の言葉で課題を明確にした指導により、生徒は意欲的に追究活動を行った。また、ロイロノートを活用して、予想を交流するなど、生徒一人一人を大切にした授業展開であった。特に全体交流の場面では、生徒の考えに対して、教師が適宜問い返しをすることで、事実認識を確かなものにすることができた。

○一単位時間の中で、課題の生み出しから振り返りまでを位置付け、緻密に計算された授業構成であった。特に当時の人々の立場に立って、原因や背景を考えることができていて、生徒一人一人に歴史の学び方が身に付いていた。

（２）価値に関する認識を形成する授業

・事実に関する認識に基づく多様な価値の明確化

○終末場面の「井伊直弼の生き方からあなたは何を学んだのか（得たのか）」の問いによる振り返りは、歴史的事象を自分事として捉えるための手立てとして有効であった。

▲井伊直弼がどのような判断基準をもとに条約を結んだのか、井伊直弼と反幕府勢力の判断基準（価値）の押さえ方が弱かったように感じる。それぞれの判断基準の背景にある事実を押さえつつ、価値に迫り、さらに井伊直弼の判断における価値を分析する過程にもっと重きを置くと、価値認識の授業となる。

授業実践２　不破郡垂井町立不破中学校（11/7）

授業者：伊藤　拓翔　教諭

単元名：欧米の進出と日本の開国

【概要】江戸幕府滅亡の要因

「何が江戸幕府を滅亡させたのだろうか」という課題で、これまでの学習をもとにキーワードを３つ用いて、滅亡の理由を考え、交流する授業。終末場面では、単元の振り返りを書き、単元を通して形成した事実認識を確かなものとした。<u>【事実に関する認識を形成する授業】と【価値に関する認識を形成する授業】の接続の授業</u>

【授業実践２の考察】

（１）「事実に関する認識を獲得する授業」

・各時代相を見いだすことができる指導計画の工夫

○単元の終末場面における授業実践は実践例が少なく、貴重な実践となった。これまでの一単位時間の積み重ねがなければ成立しない授業で、事実認識が確か

なものであったからこそ、生徒一人一人が課題に向き合うことができた。

・認識を深めるための指導方法の工夫

▲深まりがなかった。キーワードで概念を書いている生徒、事実を書いている生徒がいて、キーワードの視点のないので、話合い場面における前提にずれが生じていた。キーワードも３つあることによって、キーワードを時系列に使い、江戸幕府滅亡の経緯の説明になってしまっていた。また、交流場面では教師と生徒との一対一のやり取りになってしまった。生徒一人一人はこれまでの学びを活かし、積み上げてきた知識を使いながら全員がまとめを書くことができていたからこそ、これらの考えを、全体交流で互いに学び合い、生徒同士で深めていけるような交流になる手立てが必要。

（２）価値に関する認識を形成する授業

・事実に関する認識に基づく多様な価値の明確化

○時代の転換期を取り上げることは、その時代の価値を色濃く表すものであり、複数の立場や事実から「江戸幕府の滅亡」の理由を追究することができていた。やはり価値に関する認識を形成する授業においては、時代の転換期や当時の人々にとって切実な課題となっていた事象を取り上げることで、生徒一人一人の認識が深まっていく。

▲江戸幕府の滅亡について、話し合う必然がないと、価値を認識するところまではいかない。当時の人々が江戸幕府の滅亡をどう捉えたのか、今の私たちの判断基準ではなく、当時の社会背景や人々の思いに迫ることで、江戸幕府滅亡についての価値が理解できる。当時の人々や社会がどのような基準で判断したのかを理解することが価値認識を形成する授業では必要となる。

４　研究内容のまとめと来年度の研究の方向性

☆前提として、研究の目的を再確認する

岐中社の掲げるテーマ「主体的に社会に参画する力」を育成するために、歴史的分野において、どのような授業実践していくのかを明確にしていく。

そのために…

①歴史的分野における事実認識と価値認識の授業の再確認

価値に関する認識を深める授業では、過去の事象に立ち、現在の自分の価値観ではなく、その時代の課題が何であるかの理解や背景に立って考える。人物を通してだけでなく、社会の変化の様子を多面的・多角的に考え、その事象のもつ意味をその時代の中でどう捉えるかを考えていく。

②研究実践を絞って、毎年ブラッシュアップする

事実に関する認識を獲得する授業では、単元終末の各時代相を見出すことができる場面を実践。価値に関する認識を形成する授業（接続）では、当時の社会の判断が分かれるような場面（開国か攘夷か）など人物の判断基準（価値）が表れるような題材を選び、何度も実践を繰り返す。

☆事実認識の授業…従来通り

☆事実認識と価値認識の接続の授業

→当時の社会的背景や人物の選択・判断した価値を理解する。（価値の分析過程）

☆価値認識の授業→上記の授業を経たうえで、現代の自分の価値観と比べて、どう考えるかという自己の考え方に迫った手立てを講じた授業。

来年度の研究内容（案）

（１）「事実に関する認識を獲得する授業」

・各時代相を見いだすことができる指導計画の工夫→単元導入や単元終末の実践

・認識を深めるための指導方法の工夫

→歴史的な見方・考え方を深めるための手立て

→その時代に立って考える指導の工夫

（２）価値に関する認識を形成する授業

・事実に関する認識に基づく多様な価値の明確化

→分析

・価値に関する認識を形成するための話合いの組織化　→終末の手立て

５　おわりに

歴史的分野の研究では何が事実なのか価値なのかという話合いを繰り返し、価値に関する認識を形成する授業を何度も実践してきました。しかし、今年度の実践を通して歴史的分野において大事なことは、過去の社会的事象に対して過去の価値観（背景など）に立って考え、確かな事実認識を積み上げていくことではないかという考えに至りました。その事象のもつ意味を、その時代の中でどう捉え、現代社会との類似点や相違点をどう考えるか、そして、その時代の課題が何であるのかを理解し、生徒自身の「選択・判断」「構想」の拠り所を歴史的経緯から形成していくこと。この積み重ねが公民学習につながるのだと感じています。

令和5年度　公民的分野　本年度のまとめ

主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習

公民的分野専門委員長　岐阜市立岐阜西中学校　前島久恵

１　はじめに

今年度の授業実践では，３名の先生方が「価値を形成する授業」の実践に取り組んでくださったおかげで，授業案の検討や授業研究会の際に，様々な意見を交流し合うことができ，大変有意義な時間をもつことができた。その際，「そもそも価値形成とは何なのか」「そのために取り上げる題材はどんなものがよいのか」「その題材をどのように取り上げるのがよいのか」「授業の流れ（授業構想）としてはどうすればよいのか」など，生徒に軸足を置き，生徒一人ひとりがもつ「価値」をよりよい流れで形成するための方法を検討できたことが何よりの成果だったと考える。授業実践してくださった先生方や，たくさんの意見やアイディアを出してくださった先生方に感謝の思いを込めて，今年度の研究と次年度の方向性についてまとめていく。

２　研究内容

【価値に関する認識を形成する授業】における重点

★授業モデルの定着・発展・普及
・価値に関する認識の授業を教科書から考える
・評価の充実
　（ねらいの明確化とルーブリック評価等の活用）

★認識を深める場の手立ての在り方
・「留保条件の設定」による議論の成立（価値に関する話し合い）
・合理的な意志決定をさせるための「事実の分析的検討」

３　授業実践

授業実践１（９／２２）
授業者：本巣市立本巣中学校　　今井　達彦　教諭
単元名：「これからの人権保障」
【概要】
「マイナンバーカードの取得は，義務化すべきか」という課題で，これまで学習してきた憲法上保証されている権利や，新しい権利として認められている自己決定権，プライバシーの権利など，私たちがもっている権利を踏まえた上で，マイナンバーカードを義務化するべきかについての価値の形成に挑戦した。

【授業実践１の考察】
○追究時の視点を明確にしたことで，生徒同士の議論が活発に行われた。
→「視点」の明確化は有効な手段である。
○視点によって立場を明らかにするように指導したことにより，生徒一人ひとりの価値の軽重が判断できていた。さらに，個人内でも賛成・反対の対立が起きており，さらに思考しようとする意欲につながっていた。
→個人内での対立（迷い）は，価値を形成していく上で大切な過程である。それを言い合える学級がよい。
○自分の立場を明確にする手段として，大きさと色の違う付箋を活用していた。（大きな付箋が賛成，小さな付箋が反対，色が視点）こうすることで，自分の立場を仲間にわかりやすく伝えることができ，意見交流の活発化につながった。
→付箋（ロイロノートなどでもよい）などで，視覚的にわかりやすくすることは大切なことである。
●根拠に乏しい意見があった。社会科として，「根拠」を明らかにした発言を求めていきたい。
→「公民的分野だから，価値形成の授業」ではなく，あくまでも事実認識を重ねてきた上に成り立つのが価値形成の授業であることを再確認する。

授業実践２（１０／１６）
授業者：可児市・御嵩町中学校組合立共和中学校
　　川野　優　教諭
単元名：「公共の福祉と国民の義務」
【概要】
「なぜ最高裁判所は，大阪国際空港の夜間飛行を認めたのだろうか」という課題で，個人の権利は保障されるばかりではなく，社会全体の利益（公共の福祉）によって制限されることがあるという事実認識の上に，どこまでが公共の福祉が適用され，どこまでが権利として認められるのかを問い，「留保条件」を考えることに挑戦した。

【授業実践２の考察】
○導入から展開，まとめに至るまでの流れが大変すばらしかった。特に導入で，飛行機の騒音を実際に聴かせることで，住民たちの訴えがいかに切実であったかを実感したのちに，最高裁判所が夜間飛行を認めたという事実を知った生徒たちが，感情豊かに思いを表現していたことが，のちの思考の場面で活きていた。
→課題化までの流れは，生徒の意欲につながる大切な場面である。
○「留保条件」を考える場面では，個人の権利と公共の福祉とを天秤にかけ，場面によってどちらを優先すべきか決まっていないからこそ，答えは一つではないし，じっくり考えていかなければならないことを改めて認識することができた。

→「折り合いをつける」の折り合いにも様々な方法があるからそこ，議論の重要性を再認識した。
●課題については，事前に授業研究委員で話し合って決めたが，最高裁の判断を議論することが「公民」の形成につながるのかは再考していきたい。
→現代社会を扱う公民的分野だからこそ，文言には細心の注意をしていく必要がある。

授業実践３（１０／２４）
授業者：多治見市立小泉中学校
若尾　一平　教諭
単元名：「平等権」
【概要】
「私たち小泉中学校の制服はなぜ変更されたのだろう」という課題で，様々な違いについて考えることで，自由に選択できること＝平等ではなく，私たち一人ひとりの見方・考え方が「平等」な社会を創ることにつながることに気付かせる授業に挑戦した。

【授業実践３の考察】
○自分たちの学校の制服が，一つ下の代から変更になったという身近な変更に焦点を当て，そこから平等とは何かという一般化に繋げていくことができた。
→自分たち（中学生）に身近な事象を題材にすることで，より自分事として考えるきっかけとなる。
○制服から入り，それ以外の様々な違いに目を向けさせたことで，視野を広げ，社会全体での「平等」とは何かについて考えさせることにつながった。
●その反面，広げすぎたことでどれも一足飛びになってしまったようにも思えた。
→一点突破から，一般化を図る流れが大切であることを再確認できた。
●「選択できれば平等ではない」という共通の認識から，ではどうなれば（どうすれば）平等と言えるのか，ここに一人ひとりの価値形成がうまれるのではないか。
→「平等権」を考える際の価値形成は，差別はいけないという表向きの考えではなく，もっと本質的な部分に踏み込んでいくのも大切である。

４　研究内容のまとめと来年度の研究の方向性

３人の先生方の実践，そこでいただいた意見を元に，来年度の方向性として…

（１）授業モデルの提案

「価値を形成する」には，**①個人内の価値形成，②集団（班・学級）での合意形成**の２ステップが必要となる。

『個人内の価値形成』

１　**議論の設定**…何が問題となっているのか。
２　**視点の設定**…どんな視点があるのか。
３　**論点の整理・焦点化**…誰のため，何のためにどうすればよいのか。何が特に大切なのか。（軽重）
４　**立場の明確化**…どの立場で考えるべきなのか。
→これらを理解していく中で，自分がそう考えるに至った**判断理由を明確**にし，**自分の考えの変容**にも気づかせるようにする。
５　**相互理解を踏まえた意思表明**

『集団（班・学級）での合意形成』

６　**多数決・折り合い**…より多くの人が納得するためにはどんな方法があるのか
７　**少数意見の尊重・留保条件**…どんな条件があれば，少数意見の人たちも納得できるのか
※集団での合意形成には多数決が採られるからこそ，その多数決を意味のあるものにするために，「折り合いをつけること」と「留保条件を考える」ことが欠かせない。

（２）価値認識を深めるための手立て

集団での合意形成を図る段階での，「折り合い」「留保条件」について考える場を設定することで，個人の価値形成から，自分以外の価値に目が行き，より多くの人が納得するための解決策を考えることができる。どのような手立てをうつと生徒の思考に広がりや深まりがうまれるのか，来年度研究を進めたい。

（３）自己の変容を認識するための評価

自己の変容を認識するために，ルーブリック評価については来年度研究を進めたい。（以下，例）

	A	B	C
問題の解釈 （解決すべき課題がはっきりしているか			
解決策の実効性 （解決策によって課題が解決できるか）			
解決策の正確性 （結論と根拠が明確であるか）			

５　おわりに

今年度，公民的分野では３名の先生が授業実践の中で，様々な「挑戦」をしてくださいました。そのおかげで，公民的分野で大切にしていきたい「価値を形成する授業」の重要性を再確認し，その難しさ，奥深さも感じました。と，同時に，その「おもしろさ」「魅力」も感じました。来年度以降，より多くの先生方にこの「おもしろさ」「魅力」が伝わってほしいと願います。多くの先生方の挑戦により，様々な題材での価値形成の授業モデルを確立していきたいと思っています。今年度はご協力いただきありがとうございました。

授業研究委員の先生方へ

この後の「分科会」でご検討頂いた資料を，必要に応じて修正して頂き**１月９日（火）まで**に，**専門委員長の先生方（学校）へメールにて**送信して下さい。

【送信先】

地理＝岐阜市立藍川中学校　　勝野　陽介 先生
gichu11@aikawa-j.gifu-gif.ed.jp

歴史＝本巣市立根尾学園　　稲垣　直斗 先生
neo-jhs@ip.mirai.ne.jp

公民＝岐阜市立岐阜西中学校　　前島　久恵　先生
gichu18@gifunishi-j.gifu-gif.ed.jp

＊ファイル名は，以下の例のように「分野（学校名　名前)」として送信してください。　例　地理（北陵中　内海）

分野長の先生方へ

１月１５日（月）までに，「分野の先生方から頂いた指導計画」と「分野のまとめ」「授業研究委員会の授業の指導案」の三点を次のように集約して北陵中学校まで送付して下さい。

①ファイル名を確認し，全てのデータを一枚のＣＤＲに集約する
②プリントアウトする（誤字脱字等がないかどうか，再度ご確認下さい）
③「ＣＤＲ」と「打ち出した紙」の両方を，レターパックに入れて多治見市立北陵中学校まで送付する。

【郵送先】

多治見市立北陵中学校　内海　照幸
〒507-0071 岐阜県多治見市旭ケ丘 10 丁目 6

第56回 全国中学校社会科教育研究大会 栃木大会 参加報告書

主務 多治見市立北陵中学校 内海 照幸

1 大会名

第56回全国中学校社会科教育研究大会（栃木大会）

2 研究主題

「社会を見つめ,社会と関わる力を育む社会科学習の創造」

3 期 日

令和5年11月9日（木）・10日（金）

4 会 場

ライトキューブ宇都宮

5 日 程

6 基調提案

□ 研究主題設定の理由

1 予測困難な時代を生きる力とは?～社会と人生について洞察し続ける力～

これからの社会は、変化が激しく、これまで以上に予測困難な時代と言われている。この時代を生きるためには、様々な価値観を尊重したうえで、問題解決の最適解を得なければならない。そのためには、何がよりよいかを常に意識し続ける態度が必須である。このことから栃中社では、「よりよい社会とは何か」を問い続けられる生徒を育成したいと考えている。そしてこの問いは、突き詰めると、よりよい社会の構成員としての「よりよい人生とは何か」を自問し続けることにつながる。これは中学校社会科の目標である「平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」の育成と軌を一にするものである。また、現在は、身近に様々な情報が氾濫している。だからこそ、適切に情報を読み取ることが一層求められている。こうした時代にあって、批判的思考（クリティアカルシンキング）が必要である。栃中社では、批判的思考を「情報をただ鵜呑みにするのではなく、その情報を精査して自分なりの考えをもつこと」ととらえている。

批判的思考は、その能力やスキル（＝認知的側面）をもっているだけでは十分に発揮されず、使おうとする態度も必要である。この情緒的側面を批判的思考態度といい、4つの因子（探究心、客観的判断、多様性の許容、証拠の重視）から成る。批判的思考のみならず批判的思考態度も育成することが、よりよい社会と人生を切り拓く上で必要であると考える。

２ 研究主題について

（1）研究主題の定義～「社会を見つめ、社会と関わる力」とは何か？

以上のように、学習指導要領や本県中学生の実態を踏まえ、予測困難な未来を生きる力のうち社会科が担うものとして、栃中社研では「社会を見つめ、社会と関わる力」という研究主題を設定した。つまり、「日常生活でも、事実やより確かな情報に基づいて、社会的な見方・考え方を働かせて思考することで、よりよい人生や社会を創ろうとする力」である。そして、この力は「よりよい社会とは何か。」「よりよい人生とは何か」を将来にわたって自問し続ける基礎となるものである。

（2）社会を見つめるとは？～様々な人々の思いや情報の存在に気付き共感的にとらえる～

社会的事象には、人の思いや営み、理念が内包されている。一見、見えづらいこうした存在に気付き、肉薄し、社会的事象をできるだけ共感的にとらえてほしいという願いを込めて、「（人の思いを）見つめる」と表現した。さらに、一人の人の思いや営みが社会的事象のすべてを表しているとは限らない。複数の人の思いや営みを共感的にとらえることで、社会的事象の本質に近づいてほしいと願っている。また、誤った情報を含め、情報の氾濫する社会にあって、情報を鵜呑みにしたり、恣意的な情報に惑わされたりせず、社会的事象を的確にとらえてほしい。さらに、複数の証拠に基づいて結論を導くという批判的思考のプロセスを用いて、社会的事象を考察してほしいという願いも込めて、「（情報を）を見つめる」と表現した。

（3）社会に関わるとは？～生涯を通じて問い続ける～

様々な立場の人の思いを見つめたり、複数の情報を見つめたりしたその先にこそ、「よりよい社会とは何か」「よりよい人生とは何か」という問いにたどりつくのではないだろうかと考えている。「社会に関わる」というと、例えば、身近な地域の課題の解決策を地方公共団体に提案することが考えられるが、栃中社研の考える「社会に関わる」は、それだけではない。社会科で扱う事象やよりよい社会や人生について問い続け、模索し続けることも含まれている。社会的な見方・考え方を働かせ「なぜそうなったのか」「それにはどのような意味や意義があるのか」等を問い、「そこはどのような地域となるべきなのか（地理的分野）」「どのようなことが必要とされているのか（歴史的分野）」「私はどのようなことができるか（公民的分野）」等を、生涯にわたり構想し続ける。このことは、近い将来、社会に参画することにつながるのではないか。

３ 授業づくりの視点～どうすれば、社会を見つめ、社会と関わる力が身につくのか～

（1）視点1：批判的思考の育成～「問う」×「考える」～

ある事象に対して、社会的な見方・考え方を働かせて疑問を抱き、思考する。この授業の積み重ねが、日常生活でも批判的思考を働かせることにつながると考える。具体策をいくつか挙げる。

ⅰ ある情報に対して疑問をもつ～見方・考え方を働かせる問いで、思考が活性化する～

問いを立てることは批判的思考の根本的要素であり、批判的に考えるための第一歩である。問いを発することは、ある考えを無批判に受け入れるのではなく、より深く考え、適切に理解するきっかけとなるからである。

例えば、中学2年生の歴史的分野「江戸時代の産業の発達と町人文化」で、日光街道を扱った授業。「（宇都宮市の清住通りをストリートビューで見せながら）君たちの住んでいる家と比べて、何か違いはあるのか？」と問う。比較という小学校社会科から培っている社会的事象の見方・考え方を働かせる問いである。生徒は、間口が狭いことに気付き、「なぜ間口の狭い家が多くあるの？」と問いが喚起される。それに対して、他の生徒が
既習した地理的分野の近畿地方と関連させ「もしかして京都と同じなのでは？」とつぶやく。間口の狭さと奥行きの長さから、日光道中と奥州道中の分岐に位置する宇都宮の当時の商業が盛んだった様子を推察することができる実例である。

ⅱ 社会的事象に対する自らの考えを記録し続ける～自らの成長を実感しさらに促す～

社会的な見方・考え方を働かせて考察、構想した自らや他者の考えを記録し続ける機会を多く設定する。生徒は、過去の自分の勧化と比較することで、自らの現在の成長を実感できる。さらには仲間の考えを知ることで、自分の

考えを相対化し、考えを深めたり広めたりできる。自らの思考を記録し、振り返りの際に活用して、成長を実感することは、主体的に学習に取り組む態度の育成につながり、批判的思考の向上につながる。具体的には、単元を貫く問いを生徒と共に設定する。単元の最初に、その課題に対する自分なりの見通しをもつ。単元の途中でも適宜、見通しの吟味や再検討を行う。生徒は授業を終えるたびに、単元を貫く問いの解決を図る。過去の自分や仲間の意見を見比べることで、単元末の考察は、以前より深まりのある考察になるはずである。

ⅲ　情報を鵜呑みにせず、情報を精査して、自分の考えをもつ～当たり前を疑う～

情報があふれる社会において、今まで以上に「よりよい社会とは何か」「よりよい人生とは何か」を問い続ける態度が求められている。そのためには、社会的事象を理解した上で、どこまでの批判的思考を求めるのかという議論もある。しかし、情報源の信頼性を自分が集めた資料を基に判断する「推論の土台の検討」や、複数の根拠から情報の信頼性を高める「推論」を、意欲的に実践していきたい。

例えば、中学１年生の歴史的分野「古代までの日本」において、室町時代に描かれた『清水寺縁起』から、蝦夷と呼ばれた人々の様子をとらえる授業。生徒は彼らを見て「怖い。鬼みたい。悪者っぽい。」と感想を述べる。教師が「本当に鬼のような顔をしているのか？」と問うと、生徒は「わからない」と答える。その後、『アイヌ民族：歴史と現在』（公益財団法人アイヌ民族文化財団）から、アイヌの人々の生活を学び、「怖い」や「鬼のような顔」というイメージは払しょくされていく。ここで教師が「なぜ、鬼のように描かれたのか」と問う。朝廷の支配地域側とアイヌ民族に寄り添った側では、描かれ方が異なることに気付かせたい。このように「推論の土台の検討」や「推論」を経験させることで、情報を鵜呑みにせず、情報を精査することで、社会的事象を的確にとらえる態度を養わせていきたい。

（2）視点２：批判的思考の育成～探求心を高める資料と授業展開～

批判的思考態度は、「論理的思考への自覚」「探求心」「客観性」「証拠の重視」の4つから成るが、その育成には、「物事の真理を追い求める探求心を他の態度に先立って高める必要がある」その具体策を列挙する。

ⅰ　心的距離の近い教材を発見、開発する～生徒と社会的事象を人でつなげる～

社会科で扱う事象には、必ず人が存在する。社会的事象に内包された人々の思いや営み見つめ、肉薄することを契機として関わってほしい。そのためには、思いや営みを感じられる教材、つまり生徒にとってできるだけ心的距離の近い教材を発見、開発したい。地域教材や現物史料を扱うということではない。生徒にとって、可能な限り、リアルに人の息吹を感じられる教材である。

例えば、中学１年生の歴史的分野「中世の日本」において、『一遍聖絵』から鎌倉仏教が民衆の心を捉えていく姿を読み取る授業。史料には、やぐらの上で足を踏み鳴らしている僧を一目見ようと、身分を問わず老若男女が集まっている姿が描かれている。それを見て生徒が「アイドルのコンサートみたい」と発言した。教科書には「民衆の心をとらえてきました」という文言が書かれているが、史料が呼び水となり、実際に行ったアイドルコンサートを思い出し、その熱量まで想起することができた。

ⅱ　ICT（特に、ビデオ会議サービス）を活用する～心的距離を縮める～

Google Meet などのビデオ会議サービスを使えば、教室にいながらにして、世界中の人にインタビューができる。教材に対して心的距離を一気に縮めることができる。例えば、九州地方（中学2年生の地理的分野）の授業で、桜島周辺に住んでいる人から直接インタビューを行った。生徒が一番興味をもったのは、鹿児島県の天気予報には「桜島上空の風向き」が表示されたり、灰が室内に入らないよう夏でも窓を閉めたりするといった話であった。

教科書には載っていない生活に密着した話を聞けたのは、そこに人が確かに存在することをリアルに実感でき、「社会を見つめ、社会と関わる力」の育成に効果的だった。

他にも、ビデオ会議サービスを使用した次のような授業が考えられる。地理なら、北方領土の解決に向けて考えることの意義を見出せない生徒に対して、かつてそこに居住していた人のインタビューを聞かせる。居住していた場を喪失することとは、どういうことなのかを、人を介して生徒はリアルに気付かされると思う。歴史的分野であれば、多くの生徒にとって馴染みが薄いであろう伝統文化の継承者に、インタイビューをしてみる。

受け継がれてきた伝統を絶やさず、未来につなげることの重みに気づかされると思う。また、ビデオ会議サービス以外にもデジタルミュージアムなどのインターネット上の一次史料を教材として活用することも考えられる。

ⅲ　ゆさぶりをかける～獲得した知識を一度砕き、学習への動機を喚起する～

解決に値する問いを生むために、ゆさぶりをかけるという手立てがある。ゆさぶりの説明と効果について、「生徒が、生活経験やマスコミ情報、社会科学習で獲得した、社会的事象を説明する知識は不完全なものである。そこで、この知識では説明できない社会的事象を提示する（＝生徒の既得の知識にゆさぶりをかける）。これまでに獲得した知識を一度打ち砕くのである。これによって生徒は学び直しの必要を感じる。つまり学習に対する動機が生まれる。一方、新たに獲得した知識は、以前より深まりのある知識となる。」事実に迫る最短の知識や思考は一面的であり、探求心が高まらない。生徒の実態を踏まえ、適切にゆさぶりをかける。事実に迫る試行錯誤の過程そのものが探求心を高め、また、「粘り強い取組を行おうとする側面」「自らの学習を調整しようとしている側面」を育てると考えている。

４ 評価～研究主題と観点別評価との関連～

（１）知識・技能～思考力、判断力、表現力等の基となる、生きて働く知識の獲得～

社会を見つめ、社会と関わる力は、個々の知識・技能をより強く結び付けるものである。これは事実的で個別的な知識のみを習得させることではない。それらをより強固につなげ、概念的で構造的な知識をつくるのに有益である。また思考・判断・表現の質は、知識・技能の質によって左右されるので、社会を見つめ、社会と関わる力は、生きて働く知識より強く獲得することにつながる。

（2）思考・判断・表現～「人の願い」と「情報」を見つめる～

社会を見つめ、社会と関わる力は、自らの思考を対比し、自分でない誰かの立場に立って思考する契機となる。「A→B（原因、結果）」「A≒B（類似）」などと客観的に考えることは大切である。しかしそこには確かに人が存在した（している）のである。栃中社研の考える社会科は、社会そして人間について洞察をし続ける教科である。「A により止むを得ず B に至ってしまった」「A の解決には B しか拠り所が無かった」といった、人々の思いがそこには存在していた（いる）はずである。「社会を見つめ、社会と関わる力」により、事象の中にいる人間それぞれを見つめることを怠らず、社会的事象を追究することは、多面的・多角的に思考する契機になるのではないだろうか。

（3）主体的に学習に取り組む態度～問いと答の間の長い距離を自ら歩きながら成長する～

社会を見つめ、社会と関わる力は、主体的に学習に取り組む態度を促すものである。主体的に学習に取り組む態度には、「粘り強い取組を行おうとする側面」「自らの学習を調整しようとしている側面」の2つがある。

第５６回全国中学校社会科研究大会　栃木大会まとめ【地理的分野】

文責：岐阜市立長良中学校　山田雅史（地理的分野副分野長）

<table>
<tr><td>栃木県の主張</td><td colspan="2">研究主題「社会を見つめ社会と関わる力を育む社会科学習の創造」
〇生徒の志向の流れに沿った単元計画の作成
〇単元を貫く魅力的な問いとそれにつながる段階的な問いの設定の工夫
【授業構想の留意点】
批判的思考の育成
・批判的思考の根本的な要素＝問いを立てること
→問いの方向性を明らかにすること「よりよい社会とは何か」「よりよい人生とは何か」
→内発的発展を目指すこと　※内発的発展…地域の文化や資源に根ざした地域づくり
批判的思考態度の育成
・心的距離の近い教材を活用する（より自分事として考えが深まっていく）
・ＩＣＴを活用する（自分の考えをまとめることができる、教師が子供を把握できる）
・ゆさぶりをかける（既得の知識をもう一度問い直すことができる）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">授業を参観して【概要など】</td><td>授業Ⅰ　アジア州</td><td>公開Ⅱ　関東地方</td></tr>
<tr><td>【概要】グループごとに東南アジアに工場を置くなら軽工業、重工業、先端技術産業のいずれを選択するかを選択させ、その理由を学級で交流する。
・ホップの課題、ステップの課題、ジャンプの課題と課題が三段階で提示された。
・高い技術力に着目させたいという授業者の意図を感じた。</td><td>【概要】「関東地方が自足可能な地域になるためのプランを深めよう」という学習課題に対して、単元の学習を経て作成したプレゼンテーションを発表し、その後、他グループの発表を聞いて自分の考えの変容についてまとめる。
・本時には完成されたプレゼンテーションの交流だったため、参観の環境もあり生徒のし好の変化を見て取ることは難しかった。</td></tr>
<tr><td>栃木県の実践から学ぶこと</td><td colspan="2">□「問い」を研究の中心に据え、単元で子供の学びを捉えようと研究を推進していること
・単元指導計画の作成に「評定に用いる評価」・「学習改善につながる評価」を位置付けていることはもちろん、それに加えて「問いの構造図」として、単元を貫く問い、第一次の問い、第二次の問い…というように「問い」を単元の中心に据えて子供の見方・考え方を育成したり、働かせたりしようとしている。
・社会的な見方・考え方を働かせることと「問い」の関係性は多くの研究で重要視されているため、岐中社として、現在の研究と「問い」と「社会的な見方・考え方を働かせる」ことの関係性をどのように整理していくかは考えていく意味があると考える。
・一方で、「問い」というものが整理されていない印象も受けた。例えば、「問いの構造図」であれば、構造ならば何と何がどのような関係にあるのかを明らかにする必要がある。また、「問い」があるのであれば、それと対になる「答え」はどうあるべきか、その「答え」は次の「問い」とどうつながるのかは明確にする必要があると考えた。</td></tr>
<tr><td>まとめ</td><td colspan="2">捉え方（表現の仕方）は違えど、これまで岐阜県の社会科が大切にしてきたことは全国でも多くの先生が考えていることと通じるものがあると感じた。</td></tr>
</table>

歴史的分野　授業実践と研究協議についての報告

歴史的分野専門委員長　本巣市立根尾学園　稲垣　直斗

１　歴史的分野における研究の目的（付けたい力）※研究主題と関わって

・社会を見つめる力＝正確な事実認識をもつ力 →歴史的事象に内包されている人々の思いや営み、理念を見つめ、生徒が社会的な見方・考え方を働かせて、歴史的事象を多面的かつ多角的に考察することで育成	・社会と関わる力　＝よりよい社会や人生を築こうとする力 →普遍的な真理を歴史学習の中から見出し、自分自身の思いや考えをもつことで、よりよい社会とは自己の人生とは考え、社会に参画しようとする態度を育成

２　歴史的分野における授業づくりの視点

視点１：批判的思考の育成 ・疑問をもたせる習慣をつける →単元を貫く問いを設定し、常にその問いを意識しながら学習を進め、単元の最後に段階で単元を貫く問いに対する答えを出す。	視点２：批判的態度の育成 ・心的距離の近い教材の開発 →いわゆる地域教材 ・ゆさぶりをかける →既習知識との差異を感じる資料提示による発問

３　実際の授業実践

公開Ⅰ ・鎌倉幕府の滅亡までを中世前半のまとめとして、武士と朝廷の勢力の変化をグラフにまとめる活動。（単元の終末） ①教師から課題を提示 ②個人追究（プリント記入） ③グループ交流（一つにまとめる） ④全体交流（グループで一つにまとめたものを発表） ⑤個人の振り返り	公開Ⅱ ・地域の学制の資料を通して、当時の人々の思いから明治時代の改革について知ろうとする活動。（単元の導入） ①教師からの説明、課題提示 ②個人追究（実物の資料をもとに読み取り） ③グループ交流（一つにまとめる） ④全体交流（グループで一つにまとめたものを発表） ⑤個人の振り返り
２つの授業に共通すること ①課題は教師から与える　②グループで考えを一つにまとめる　③ICT（オクリンク）で集約する	

４　全中社栃木大会からの学び

・単元を貫く問いに関わって、振り返りを蓄積していくような指導（ワークシートに書かせる等）が必要。
・「どの資料から、どの事象から」という子どもの学びの事実に立って、確かな事実認識を大切にする。
・教師が「なぜそう思うのか」などの問い返しをすることで子どもの見方・考え方を働かせて考えを深める場面が必要。
・単元の終末や導入など、時代を大観する授業実践への挑戦。（単元の導入や終末）
・教師と生徒のやり取りが一対一にならないように子どもの考えを広めたり深めたりする手立てが必要。

岐阜県がこれまで進めてきた研究で、どれも大切にしてきたことばかりだと感じました。子どもの近くで見ることができなかったため、どのような思考の変容があったのかは分かりませんが、県内の先生と研究会で話す限りでは、普段の授業ではこのやり方はしていないと話していたので、研究発表用の授業であったと感じています。歴史においてはやはり事実認識を大切にして授業実践を進めていきたいと思いました。

第56回　全国中学校社会科教育研究大会

栃木大会　公民的分野　振り返り

公民的分野専門委員長　岐阜市立岐阜西中学校　前島久恵

１　大会主題

『社会を見つめ，社会を関わる力を育む社会科学習の創造』

２　栃木県の研究提案より

・研究主題設定理由

現在私たちはVUCA［Volatility（変動性・不安定さ），Uncertainty（不確実性・不確定さ），Complexity（複雑性），Ambiguity（曖昧性・不明確さ）］の時代に生きており，今後の予測が困難になる反面，今までにない新たな価値が生まれる社会になると考えられている。多様な価値観，多様な生き方が存在する社会を生徒が生きていくために必要な力として，平成３０年から上記の研究主題で研究・実践を重ねてこられた。

・授業構想の留意点

視点①：批判的思考の育成

→単元の学習を始める前に，生徒の意識調査を行い，それをもとに「単元を貫く課題」を設定

→一授業または，一次ごとに単元を貫く課題に対する仮説の振り返り

視点②：批判的思考態度の育成

→批判的思考態度の４つの因子「論理的思考への自覚」「探究心」「客観性」「証拠の重視」の中から，中学生という発達段階を考慮し，「探究心」を軸に授業の工夫

３　公開授業に関わって

【公開授業Ⅰ】　高根沢町立高根沢中学校　三上文也　教諭　「私たちと政治」

「よりよい社会を実現するためには，どの政党に投票すればよいだろうか」というめあてのもと，政党が掲げる分野ごとの政策（経済・財政・物価高，消費税，子育て，教育，高齢者支援，ベーシックインカム）から，最善と考える内容を選択（タブレット）し，それを選んだ根拠をプリントに記入していった。この時，政策は政党ごとに色分けされており，自分が多く選んだ色＝支持する政党というように，わかりやすく工夫されていた。自分がそれを選んだ（支持した）理由について，小集団で交流し，最終的にどの政党に投票するかを決定する授業であった。小集団交流において，自分と違う意見を聞き，そういう考え方もできるんだという認識を持たせたことで，自分の考えを広め，深められていたと感じる。また，各分野の政策の内容が，政党ごとに色分けされていたことで，「この分野ではA党を支持するけど，こっちの分野ではB党のほうがいいから…どうしよう…」という迷いが生まれ，自分の中で何に重きをおいて投票するか，じっくり考えられていたように思う。資料の提示の仕方の工夫で，生徒の思考を深めることができると再確認できた。

【公開授業Ⅱ】　那須塩原市立那須野中学校　月井大輔　教諭　「私たちの暮らしと経済」

「よりよい企業とはどのような企業なのか」という目標のもと，前時までに生徒たちが考えて「起業」した「企業」に対して投資し，自分がなぜその企業に投資したのか，理由を明らかにしながら，よりよい企業とはどんな企業なのかを考えていく授業だった。まず，前時までに考えられていた生徒が「起業」した企業のアイディアが豊かで，魅力を感じた。また，本時の導入において，生徒たちの前に布で隠された大きな机が置いてあり，その布を外すと，それぞれの企業に集まった金額が，札束の模型で置かれており，生徒たちの関心を一気に集めた。多くの金額が集まった企業とそうでない企業の違いを，レーダーチャート（観点：事業内容，利益，労働環境，ＣＳＲ，持続性，実現可能性）を基にしながら，小集団で意見をまとめていった。教師の問い返しでは，「持続性とは，どういうことを言っている？」と視点を明確にさせようとしたり，「価格が安いというのは，どの立場の人の意見？」と立場を明確にさせようとしたりしていた。まとめでの生徒の発言では，「はじめは労働者目線だけだったけど，私は実現可能かが重要だと考えた」と，自己の考えの変容について語る姿も見られた。

４　全国大会から学ぶこと

①題材（教材）の工夫

どちらの授業も，題材の取り上げ方，提示の仕方が工夫されており，それが生徒の思考の広がりや深まりにつながっていると感じた。私が見ていても，「おもしろい！」と感じるものだった。

②単元構造図の工夫（ストーリー性のある単元の展開）

同じ東京書籍の教科書だったが，授業の順番が工夫されていた。こんな流れで展開するのもおもしろいと感じさせてくれるものだった。自分たちにある既成概念でなく，生徒の思考に沿ったストーリーを描くのもおもしろいと感じた。

令和５年度　岐阜県中学校社会科研究部会

西濃地区大会　地理的分野　振り返り

地理的分野専門委員長　岐阜市立藍川中学校　勝野　陽介

１　公開授業

会　場：大野町立大野中学校
授業者：竹中　智洋　教諭
単元名：アフリカ州　―国際的な支援からの自立に向けて―

２　指導の立場（研究紀要と指導案より抜粋）

アフリカ州の現状を踏まえた支援の在り方と，未来について考えさせる。単元を貫く課題の解決に向けて自己の考えを形成させる時間をとり，その考えを基に，他者との対話を生み出すことで，考えを再構築させる。そこで，自分なりの納得解を導き出せるようにする。

本時では，主張する考えの背景にある「価値」を浮き彫りにする。この「価値」とは，「様々な問題に対して判断する際に，自身が社会の形成にふさわしいと考えるもの」と捉えた。

まず，黒板で「今を救う支援（医療，食・水，インフラ等）」と，対をなす「将来を見据えた支援（教育，技術支援等）」を視覚化する。

次に，それぞれの支援の在り方のメリットとデメリットを考えさせ，その支援が「何を大切にした支援なのか」を問うことで，今を救う支援とは「生命尊重」を重視した支援であり，将来を見据えた支援とは「自立」を重視している支援であることを理解させる。こうして自己の考えの背景にある「価値」を自覚させる。価値の明確化。

その上で，どちらも「アフリカ州の持続可能な社会の実現に欠かせない支援」であることを押さえ，「生命尊重」か「自立」のどちらで判断するかを問う。教師が話合いをコーディネートし，それぞれの意見の主張に終始せず，「価値の対立」を生み出すために，「なぜその価値を尊重するのか」と論点の明確化を図ったり，「本当にそうなのか」と批判的思考を駆使したりしながら交流を進める。

授業終末には，他者の尊重する「価値」を踏まえた上で，自己の考えを再構築する営みによって考えの深まりを実感させられると考えた。

３　研究会での意見

○二時間構成の意図→まとめとしっかりと書かせたい。前時で生徒の思考を掴むことができる。

○題材がよいので，ディスカッションさせる授業もできるのはないかと考えた。同時に，アフリカの教材の難しさには留意をしたい。

○教師の問い返しで授業が進められるのはよかったが，ディベート形式や少人数の学習班で自由に話せる時間も有効ではないかと感じた。

●支援の主語は？日本なのか，国際的な立場なのか？自分事としてとらえるには難しさがあるからこそ，主語を明らかにしたほうがいい。

●どちらも大事と押さえた上で，どちらかを判断させることは，生徒の思考で考えると無理ある。

４　ご指導

○確かな事実認識に基づき，価値に関する認識を形成することはできる。生徒は事実認識を活用して，多面的・多角的に考察できていた。

●地理的分野で考える価値は何か？どうしても現代社会の見方・考え方が必要になってくるからこそ，地理的分野の中で形成したい価値を今後も考えていく必要がある。分野ごとの役割と同時に，接続の研究が進むことが望まれる。

５　地理的分野専門委員長考察

アフリカ州で価値に関する認識を形成する授業を実践することが難しいのは，授業モデルの問題か，教材の難しさか。その両方か。挑戦したからこそ見えてきた。そのことに敬意を表したい。

価値の明確化にこだわりすぎると，生徒の思考から離れることになる。生徒の思考に立って授業を仕組み，問い返しや深めの発問でコーディネートしたい。

対立にこだわる必要はない。対立しないなら優先順位をつけたり，割合で考えたりできる。今後は，「価値に関する認識を形成する授業モデル」を見つめ直し，ブラッシュアップさせていきたい。

県大会（西濃大会）歴史的分野　振り返り

歴史的分野専門委員長：本巣市立根尾学園　稲垣直斗

単元名：開国と日本の歩み－第３節　明治維新	
場所　：大垣市立興文中学校	
授業者：三輪　大輔　教諭	

①授業を参観して感じたこと【生徒の姿より】

研究内容（１）①	研究内容（２）②	研究内容（２）③
・これまで学習したこと（事実）をもとに、４つの視点から欧米と肩を並べるために最も重要な政策を自分で考えて発言できていた。 ・欧米の革命や社会の様子から判断できていた。 ☆「欧米と肩を並べるために」という単元を貫く課題を生徒は意識して、考えることができていた。これまでの事実認識の形成があったからこそ、生徒は事実をもとに自分の考えを堂々と述べることができていた。	・「欧米と肩を並べる」という課題に沿って、生徒は４つの視点から考えていた。 ・外国が何を求めているか、という事実から「資本主義を求める、だから殖産興業が大事」のように外国の現状を掴み、理解していたからこそ判断することができていた。 ・「国家」として何が必要かという価値観が表れている発言が多かった。	・技術の発展が大事、軍事が大事、憲法が大事など、生徒の中にある「国家」を作る上での価値が表れていた。 ・「最初は立憲制国家だったがＡさんの話から資本主義を外国は目指していたから、だから殖産興業が大事。」のように仲間の考え方を引用しながら自分の考えを再構成していた。

②価値に関する認識を形成する授業にするために…

・生徒の発言には「国家」として何が大切なのかという「価値」が表れていた。

「最初は憲法が大事だと思っていて、それは自由、平等は国民にとっては必要だから。でも、自分が欧米の立場なら学制などの税制を国家として整える方が大事だと思う。」

生徒は確かな事実認識をもとに自分の考えを構成する力があった。また、教師も適宜問い返しをしながら、認識を深めることができていた。もしかしたら、生徒の発言の裏にある「国家として必要なこと」を問うような問い返しをすることで、価値が明確になり、深まる場面ができたかもしれない。

授業者は「答えのない課題」や「仲間の意見を引用すること」、「もしこうなら」という公民の学習への意識付けをして、生徒の力を伸ばすことを意図して授業を計画し、行っていた。生徒の歴史的事象に関する事実認識は確かなものであり、事実認識をもとに選択・判断する力の育成を図ることができていた。このような研究実践があったからこそ、生徒の力の育成につながり、歴史的分野における研究の推進につながった。

令和5年度　岐阜県中学校　社会科研究部会

西濃地区大会　公民的分野　振り返り

公民的分野専門委員長　岐阜市立岐阜西中学校　前島久恵

１　公開授業

学　級：養老町立高田中学校　３年１組
授業者：長堀　真人　教諭
単元名：地方自治と私たち

２　研究との関わり（紀要より）

（１）社会の形成に参画する力を育てるための指導内容の明確化

本時の「養老町は西濃地域の他の市町村と合併すべきか」という課題を追究する視点を，「住民への公共サービスを維持できるのか」「地方財政は維持できるのか」「人口の流出を食い止めることはできるのか」「住民の意見が反映された政治が行われるのか」「町の経済は維持できるのか」とした。それぞれの視点は，地方行政の長所と短所が含まれており，市町村合併の事実に関する認識であり，本時の追究視点である。(以下略)

（２）社会の形成に参画する力を育てるための指導方法の明確化

価値に関する認識を深めていく際に，「折り合いをつけながら，自分なりの最適解を導き出すための条件」という留保条件を生徒に提示する。本時の話し合い活動において，生徒の間でおきた意見の対立を，生徒同士が合意するために以下の手立てを行う。

①問い返し

「なぜ，合併すべきだと考えたの？」
【判断理由の明確化】
「賛成（反対）の立場の意見は分かった？納得できる？」**【相互理解】**
「合併すべきだと考える人は，合併すべきではないと考える人の意見を踏まえて，どうすればいいと思いますか？」**【留保条件】**

②判断する際の価値の明確化

それぞれの視点に対して，「できるのか」「できないのか」や，優先順位を考え，それらを基に「合併すべきか」「合併すべきでないか」を判断できるように授業を展開する。そしてその価値に対する対策を考えることで，合意に至るための条件を生徒が考える手立てとした。

３　成果と課題

【成果】

○生徒が視点ごとに「合併をすべき」「合併すべきではない」を考えることで，生徒同士の意見の対立を生むことができた。意見の対立も，感情的な意見の対立ではなく，視点に沿った対立になり，その後の合意に向かうための条件を考える活動にスムーズに入ることができた。

○視点を板書に位置づけ、それぞれの視点が、賛成、反対どちらの根拠になっているかを視覚的に提示し、留保条件を考える足場にした手立ては、効果的であった。

○価値に関する認識を形成する授業の確かなモデルを、提示していただけた。生徒の意見を一つ一つ位置づけ、整理し、視点を明らかにした上で、合意に至るための留保条件を考える。この流れを、他の価値に関する認識を形成する授業に当てはめていけば、他の単元でも実践可能であると考える。

【課題】

●教材開発の是非については、「合併に賛成」、「合併に反対」という二項対立で授業展開をしたが、「合併ありきで話し合いが始まっていないか？」や，「養老町の都合だけで合併を考えていないか」と言うご意見があった。二項対立は、確かに合意に向かう条件を考えやすいが、それが実際に社会事象と異なっていてはいけない。事実や認識の歪曲になってしまう心配がある。しかし、対立軸を多様化すると、収拾が付かなくなる。どうすればいいか、今後更なる実践が必要になる。

●「全体での合意については･･･」という意見があった。本時では、個人での価値判断に重点を置いたが、全体での合意形成までをねらうのであれば、どのような実践をすべきか。単純に多数決をするだけでは、合意に至ったと言えないのではないか。吟味と実践が必要になる。

●価値判断の根拠を明確にすると良いというご意見があった。未来予測的な意見になってしまうため、どうしても根拠に乏しい意見が増えてしまう。根拠を明確にしないと、社会科の学習が成り立たないことは分かるのだが、どうすればいいのか。今後も考えていかなくてはいけない。

４　西濃大会を受けて

今回の西濃大会で，『価値に関する認識を形成する授業の確かなモデル』を、提示していただけた。価値と価値のぶつかり合いにより生まれる対立に，どういう選択，どういう判断をしていくのか。自分がもっている思いや考えには，どんな「価値」があるのかを自覚させながら，生徒にとって価値ある公民の授業を展開していきたい。